



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

米国：イラク情勢に備えて空母「ジョージ・H・W・ブッシュ」をペルシャ湾に派遣

6月14日、ヘーゲル米国防長官は、アラビア海北部で活動していた空母「ジョージ・H・W・ブッシュ」にペルシャ湾に向かうよう命じた。イラク情勢の急速な悪化を受け、イラクでの軍事行動の実施に備えたもの。15日、「ジョージ・H・W・ブッシュ」は、ミサイル巡洋艦「フィリピン・シー」、ミサイル駆逐艦「トラクスタン」と共に、ペルシャ湾に到着した。

「ジョージ・H・W・ブッシュ」は2009年に就役した最新の航空母艦で、ニミッツ級の10番（最終）艦。排水量は10万トンを超え、乗員3200名、航空要員2480名、搭載機90機を擁することができる。米空母は2012年に「エンタープライズ」が退役して以来、10隻体制で運用されている（2016年に「ジェラルド・R・フォード」が就役すると11隻体制に戻る）。

考察

ペルシャ湾に米空母が展開したことで、今後の情勢次第では、イラクにおいて軍事行動が行われる可能性が出てきた。オバマ大統領は13日の時点で、「イラクは更なる支援を必要としている」、「我々は、国益が脅かされる時にはいつでも軍事行動に出る準備がある」と述べたが、同時に、「イラクの戦闘に再び米軍を送ることはない」と、地上部隊の派遣は検討していないことを明らかにした。このことから、仮に米軍が今般のイラク情勢に関与するとしても、無人機による空爆といった限定的な武力行使の形態が考えられる。

アフガニスタン戦争・イラク戦争という前政権が残した二つの負の遺産から脱却することを掲げて大統領に就任したオバマにとって、イラク情勢に深く巻き込まれることは、自身の政策の誤りを認めることになりかねず、政治的なリスクがある。近年の中国の急速な台頭を背景に、アジアへの「リバランス」を唱えるオバマ政権には、中東情勢にかかりきりになることを避けたいという思惑もあろう。14日にケリー国務長官はズイーバーリー・イラク外相と電話会談し、イラク政府が4月の総選挙を受けた挙国一致体制を実現することを要請しており、イラクの政治基盤の早期確立が治安の改善につながるとの見解を示している。

(村上研究員)

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799